

あかさたな 第31回所沢こどもルネサンス
第32回 所沢こども文学のひろば

詩 特選作品

目次

ことば	小学一年生	……	1
うつくしい竹	小学一年生	……	2
きりん	小学二年生	……	3
天道虫	小学二年生	……	4
かわ	小学二年生	……	5
光	小学二年生	……	6
きせき	小学二年生	……	8
ぼくは海がすきだ	小学三年生	……	9
おねえちゃん	小学三年生	……	10
成長	小学四年生	……	12
どうしてかは	小学五年生	……	13
つながる気持ち	小学五年生	……	14
ジェットコースター	小学五年生	……	16
ゆめ	小学六年生	……	17
空と山	小学六年生	……	18
ペテルギウス	中学二年生	……	19
愛	中学二年生	……	21
夏	中学二年生	……	22
綺麗だった	中学二年生	……	23

ことば

小学一年生

ことばは
なぜ
つくられたのか

しぜん
にできたのか

それ
が

だれ
が
たのか

それ
に

じ
だ
い
に
つ
く
ら
れ
た
の
か

い
ま
で
は

ふ
い
つ
う
に
い
る
け
い
ど

た
い
へ
ん
そ
う
に
い
っ
て
い
る
こ

も
い
は
る
け
い
る
こ

そ
う
い
っ
て
い
る
こ

ぼ
く
の
こ
と
ば
は

ゆ
き
な
だ

うつくしい竹

小学一年生

土でそだつ

たけのこさん

いっぱいのびて

竹になる

竹がゆれて

すずしいかぜをおくってる

竹にはかぐやひめがいるかもしれぬ

竹のいろはさわやかなみどり

竹はあざやか

竹のようにすくすくのびたいなあ

きりん

小学二年生

雲より上が見えるきりんが

いたら、いいなあ

もしも、見えたら、

きりんによじのぼって、

雲の上に名前をいっしょにつけたいなあ。

それから、ずっといっしょにいて

ごはんをあげたり、

わたしがたべたりするときも

きりんによじのぼって、

いっしょにたべたいなあ。

本とうに、そんなきりんに出会ったら、

わたしは友だちやかぞくに教えて

あげたい。

天道虫

小学二年生

ぼくの 名前は てんとう虫

からだの色は 赤と黒のつぶつぶさ

花火みたいに きれいなんだ

ぼくは まっすぐすすんで

さきつちよまで行くと 空もとべるんだ

ぼくの すきなものは アブラ虫

アブラ虫は おしりから

あまいしるを 出すからね

ぼくの ライバルは アリさ

どうしてかって？

ぼくは アブラ虫を たべちゃうからね

きょうも ぼくは にわをさんぽする

お日さまが 気もちいいな

かわ

小学二年生

かわに ふーっといきをかけ

はっぱに てがみをかいて

かわに そのはっぱをながし

かわのてんしに ところをつたえる

光

小学三年生

広がる 人から人へ
伝わる 伝説みたい

あつという間にふくらんで
あたりは 心配と不安の山

こわいから
何もしない 全部見たくない
外にも出れず うなだれる

わたしの手 あなたの手
つなぎたいのに つなげない

でも ほら見て

あそこに光が見える

コンクリートのすき間から

小さい花が顔をのぞかせている

ほら

雨が止んで虹が出ている

ここには

ツバメの赤ちゃんが

母親の帰りを待っている

あなたの手 わたしの手

つなげる時が きっと来る

きせき

小学三年生

人間はきせき
なんでだと思う
だって生まれたんだ
ぼくたちは きせきから生まれた
そう 生きているとき
つらくても
悲しくても
うれしくても
みんなきせき

ぼくは海がすきだ

小学三年生

ぼくは海がすきだ！

おきの方まで泳いでいきたい
花火の音ドーン、貝の音フアーン

今年は海に行けなかった

ざんねんだった

悲しかった

いやだった

この世界からびょう気がなくなったら
海にいける！

来年は海に行って泳ぎたい

きれいだし、魚もいるから

つりをしてとった魚を食べてみたいから

貝も見つけない

花火も見たい

来年の夏には世界が元気になりますように

おねえちゃん

小学三年生

おねえちゃんて
なんでこんなにたいへんなの
おねえちゃんは、
あまりお母さんに
あまえられない。
理由は、
妹二人がいて
わたしは、
ぜんぜんあまえられない。
だってわたしは
おねえちゃんだから。
おねえちゃんは、
たいへんだ。
だけど、
妹がいると楽しい。
だって
遊び相手がいるから
うちの二番目のせいかくは、
何にも気にしない。

うちの三番目のせいかくは、
とつても強い。
だつておこられても、
わらつてごまかすから。
やっぱり強い。

一番上は、
妹たちがやつてない事も
わたしのせいにされる。
そして、
お母さんがお買い物をしている時
ないちやう妹たちに、
わたしが、
大事にしている物をあげたり、
ダンスをおどったり、
だっこしてあげたりする。

お母さんお父さんが
「妹のお世話が上手」と
二人そろつて言ってくれる
そう言われるとうれしい。
またやろつて気持ちになる。
だから、がんばっているんだ。

成長

小学四年生

母が食べた アボカドのたねが
成長している

最初は 小さなたねだったけど
今では りっぱな クキが一本

大きな木に なってほしい
世界の中心になるような大木に

アボカドのそばに 眠ってるネコも
成長している

小さい時は いたずら大好きだったけど
今では りっぱな 黒ネコに

いつまでもいっしょに いてほしい
どんな時も 天使のように

そして ぼくは
何になるのか なやんでいる

どうして かは

小学五年生

どうして かは 血をすうのだらう
どうして かは 人をかゆくするんだらう
どうして かは ぼくばかりさすんだらう

ぼくは かにいっばいさされる
友達といても ぼくばかりさされる
血にも 色んな味があるのかな
おいしい 血が いっしゅんでわかるのかな

虫よけを たっぷりぬっても
服の中とか つかつ下のなかまで 入ってくる
いつどうやって 入るのかな
虫よけしないで ところがいっしゅんでわかるのかな
ぼくはかゆくしてかゆくして 体をゴリゴリ
どんどんきずが ぶえていく

どうして かは 血をすうのだらう
どうして かは 人をかゆくするんだらう
どうして かは ぼくばかりさすんだらう

きっと 今日も公園で
かは ぼくをさしてくるんだらうな

つながる気持ち

小学五年生

気持ちは

ウイルスのように

うつっている

ふつうのウイルスは

病気だけれど

気持ちでうつる

だからイライラすると

周りの人も

イライラする

イライラすると

いいことがない

世界中がいやな気持ちで

いっぱいになる

ずっとみんながイライラな気持ちだと

人生がつまらなくなる

気持ちは

電線のように

つながっている
ふつうの電線は
切れてしまう時もあるけれど
心の中にある電線は切れない
だからここにこすると
周りの人も
ここにこすると
いいことがある
いつか世界中が
やさしさであふれる
でもみんなが
優しすぎて
逆に大変なことがある
みんなが電車の席をゆずり合って
すわれなくなる
でもみんなが
やさしいことはい
世界が笑顔で
いっぱいになるから

ジェットコースター

小学五年生

最初はドキドキ

こわいから足がふるえた

しがみつく

フワッ

風になったみたい

鳥になったみたい

きれいな景色が見えた

キヤー

その時みんなとつながった

ゆめ

小学六年生

もしも私に つばさが生えたのなら

私はそれで どこまでも飛んでいくだろう

もしも私に よく聞こえる耳がはえたのなら

私はそれで 世界中の音を聞くだろう

もしも私に どこまでもみえる目があるのなら

私はそれで 世の中の全てをみとおすだろう

もちろん そんなつばさや耳や目があるわけではない

私はそれでも 今を必死に生きている

今を必死に生きていく

もしも私に つばさが生えたのなら

私はそれで どこまでも飛んでいく

空と山

小学六年生

山の雨雷も鳴り始めた

雨宿りをしていた目の前に

木々が立っている

雨に当たり

とても気持ちよさそうに

ずんずん

空は怒っているけど

山は笑っているみたい

やがて空は晴れて

一緒に喜んだ

ペテルギウス

中学二年生

「あいつ、そろそろ、消えるってよ。」

そんなことを あの人がいった

ここらで一番 目立ってやがる

まだまだ新人 八百五十万歳

僕なんかまだ 八百万歳

教えてくれた あの人、二千五百万歳

あいつのこと 煌くセンスがあるって

いつも何度も 僕に向かって言ってくる

本当にあいつ もう陰ってきてやがる

もし消えたら 僕は目立てるかもって

思ってしまう 考えてしまう

もう会えない　そういきなり言われて
顔が固くなり　返事に困って
周回軌道が、　止まった気がして
体とお腹が、　黒くなった気がした

でも気づいた　僕は自分で輝くんだって
自分自身で、　輝かせるんだって

恒星　覚悟して

後生　覚悟して

愛

中学二年生

周りの人を見渡せば、愛の形が見えてくる
あちらの犬とその飼い主
二人は厚い強い愛で満たされている
犬は愛を飼い主にそそぎ
飼い主は愛を倍にしてそそぎかえしている
そちらに見えるはおそろいの服を着る親子
どうやら二人の愛は違う色
親は赤い愛を輝かせているが
子はさめた青色の愛を乾かしている
色の違う愛は結びつかず遠くへどんどんきえてゆく
むこうに歩く男女が見える
どちらの愛も相手の愛に入りこみ
抱きしめたいと思ってる
ゆずれぬ二人はそのままに
過ぎてゆくのは時間だけ
みんなが愛を持っている
愛の無い者は死ぬ

夏

蝉が夏を搔きむしって
切り裂かれた熱気模様
メランコリーに騒ぎ出す
剥がれ落ちた樹木の欠片
希望の雨粒空から落ちて
砂と混じって輝き果てる
夕暮れに感傷が居座った
瞬間に溺れた少年の目
歪んだ悲しみが唸り出す
夏を絞り出す右手
とても酸っぱくて
深い謎のような味
浮かび上がる星影は
空虚に漂う存在証明
鈴の音に銀の月
世界は幕を閉じて

中学二年生

綺麗だった。

中学三年生

朝、起きて窓の外を見上げるとあなたはいつもそこにいる。
私が、どんな場所へ行こうともあなたは必ず私を見下ろして
くる。

あなたは、よくコロコロと表情を変えては人々を魅了し、
また、人々を苦しめる。

私が、どんなに手をのばしてもあなたには決して届かない。

そして、

そして、

私が、

苦しい時、

悲しい時、

つらい時、

悔しい時、

泣きたい時、

叫びたい時、

あなたは、

空という名前のあなたは、
世界のどんな宝石よりも、
涙が零れてしまいうくらい、

綺麗だった。